

末盧國

外山幹夫

外山
張氏

令和六年六月三十日刊

呼子町 濱口尚美

但壺ノ二付貳百五拾四文

この史料は唐津市所蔵の

安政六年

末年 伊岐佐紙漉所御入用錢

調書上帳

十月

百八拾六文

但壺 二付百八拾六文

此イキ 壺

四百拾八文

但壺 二付貳百九文

此イテ 式々

四百四拾文

但壹、二付貳百貳拾文

この史料でみると白保のイ
牛の等級の漉き賃は壹匁につ
き一八六文だったことがわか
ります。

なお、紙の単位は二十枚で一帖、二千枚で一匁、六匁で一丸です。

このように、和紙「唐津紙」を専売品として藩の財源としていましたが、明治維新を境として藩が廃止されると、藩が扱っていた楮皮の買い上げや唐津紙の製造や販売も自由となりました。紙方役所は明治時代になると紙道署と呼ばれていましたが、明治五年頃廃止され、その後、大島興義（小三太）が船宮に紙方役所を作り自由販売を始めます。

それ以外にも浜崎の武谷商店・門田商店、京町の立花商店、新堀の大島商店でも販売されるようになりました。唐津紙は元々、日常に使用する半紙や薄く上質のちり紙として使用された白保紙、厚みのある永仙紙を生産していましたが、明治時代に入ると京花

紙や白保紙、旧半紙のちり紙へと転化し生産します。さらに、大正時代には唐津紙の改良を行い新たに生産した京花紙は唐津紙を指すほど有名になり近畿地方の女性の懐紙（上質ちり紙）として愛用されました。

しかし、全国的にも明治三十年代をピークとして手漉きから機械漉きへと転向していき洋紙が主役となつていきます。元々、農閑期を利用した副業として行われていた紙漉きでは對抗することができず、伊岐佐紙漉所があつた付近では昭和四十年頃まで、長倉（現：佐賀県東松浦郡玄海町有浦）では五十年代でいづれも途絶えてしまいました。

【題簽】外山 幹夫

(一九三一—二〇二三)

長崎市生まれ。一九六一年
広島大学大学院文学研究科国
史学博士課程修了。「大名領
国形成の過程の研究」で文学
博士。長崎大学教授。退官後
名誉教授。著作に「中世九州
社会史の研究」、「中世の九州」
等多数。長崎県文化財保護審
議会長、長崎市史編纂委員会
長などを歴任。二〇一二年に
瑞宝中綬章授章。

力が増し、夫の江上家種は朝鮮の役で釜山にて死す。一六〇九年(慶長一四)に弟喜前のいる大村城二ノ丸に隠棲して二ノ丸様と言われた。幕府に對して仏教徒であることをアピールして大村藩を助けたとされるが、実は墓碑の石祠からマリヤ像が発見され、熱心なキリシタン信者であった。

峠の頂上では徐行して、藩境石(従是南大村領)を見ながら二〇〇メートル下にある俵坂バス停で停車し、車中より俵坂番所跡を見学。会長による俵坂番所の説明があった。俵坂番所は俵坂峠の北側にあり、江戸時代の番所(関所)で、佐賀藩(蓮池藩)が管理していた。正しくは「俵坂口番所」といい、戦国時代にすでに番所として機能があったと伝わる。江戸時代には長崎街道として藩境の要地となり特にキリシタンの取り締まりが厳しかった。領境石には「従是北佐嘉領」とある。皆様のご協力により、無事見学を終えて帰途につきました。ありがとうございました。

第四六回松浦党研究会並びに研究大会唐津開催の概要報告

去る令和六年六月一日(土)

に。唐津市相知町の相知文化交流センターサライホールで、第四六回松浦党研究会連合会の総会並びに研究大会が開催された。松浦党研究会連合会は平成十七年の合併以来、現在所属数が減り佐賀県は、伊万里市、唐津市、長崎県では松浦市、佐世保市、平戸市の五市の県域を越えた連合研究会となつてゐる。唐津市での開催は、令和二年(二〇二〇)の第四二回大会、令和三年(二〇二一)の第四三回大会が計画されたが、新型コロナ感染症の拡大によって、いずれも中止を余儀なくされた。今回ようやく、その責務を果たすことができて安堵している。大会は、午前中に①総会行事、②研究発表、そして午後③記念講演会である。

①は総会の主体行事

・令和五年度事業報告・決算報告

・令和六年度事業計画(案)・予算(案)が報告され、質疑応答がなされて承認された。

②の会員研究発表では会員でもあり、唐津市教育委員会生涯学習文化財課の学芸員である坂井清春氏による、「唐津の町並みはいつどのように創られたか?」「新説・唐津城築城」城下町編」と題しての発表が行われた。唐津城石垣再築工事の文化財調査の中心として活躍している坂井氏の

発掘調査の現場からの新しい情報と町田川護岸工事からの新知見を交えた報告は、中世唐津町の形成にかかる重要な情報を提供すると同時に、上松浦の松浦党の「会所」の位置にも迫る興味ある内容であった。

③の山田洋会長の記念講演、「千々賀甘木谷にある二基の石碑」お久様と呼ばれて祀られてきた宝塔の謎」は、尊卑文脈、松浦党諸家系図、そして松浦家世伝に伝える、久伝説と「小右記」に記録される全肥前介源知の関係を解き明かそうとする試みであり、上松浦に始まるとする松浦党始祖の解釈は、今後の松浦党

研究の新しい展開を予測させるものであり、質疑もその分活発であった。

準備から運営まで、多くの史談会会員の皆さんの協力を得られた。約一五〇名の参加の大会は久方振りの盛況で終わった。皆さまに感謝したい。ありがとうございました。

秋の探訪旅行の募集

今年度の秋の探訪旅行が左記の通り決定しました。

日時 一〇月一六日(水)

場所 長崎市内探訪

・二六聖人殉教地

・長崎歴史文化博物館

・出島和蘭商館跡等

※予定しておりました一泊の熊本人吉方面の旅は、

諸般の事情で中止になり、

今回も日帰りのバス旅行になります。

経費 一万二千元

多くの皆様の参加をお待ちしております。参加を希望される方は事務局に連絡をお願いいたします。

〆切 八月末

◇編集後記

末盧国二三八号の編集が終った。今回も、多数の執筆者の投稿があり、編集者を悩ませるうれしい限りである。分割掲載となつた執筆者はお許しを願いたい。

今年度の最初は、松浦党研究会連合会の唐津総会開催で忙殺した。その間に、小説家北方健三氏の訪問を受け、会長と松浦党の研究状況などのお話をした。

松浦史談会という名の元では、中世史研究が主体に見えるが、先史、古代、中世、近世、そして近代地方史研究の領域は広く、そして地道な作業で時間もかかる。そうした一見、結果の見えにくい作業が本当は、最も大切なものと考え、人がどのくらいいてくれるの、だろうか、と時代の波に困苦している。

末盧国 第二三八号

発行 松浦史談会

事務局 唐津市旭が丘六一五

電話 〇九〇一八九二一三七九一

郵便振替口座

〇一七二〇一七一三〇八〇四